

指導者（保護者）として大切にしたいこと（その36）

～「負けることの大切さ」～

2022年3月吉日

U12部会広島地区

SV 大庭 浩資

広島県バスケットボール協会U12部会広島地区の保護者の皆様、指導者の皆様、役員の皆様、本年度も1年間、たいへんお世話になりました。

また、この3月18日で選手が卒業された保護者の皆様、お子様のご卒業、誠におめでとうございます。そしてこれまでのU12部会広島地区へのご支援・ご協力に対しまして、心よりお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

さて先日3月19日から21日にかけて6年生大会が行われました。

例年のような形での開催とはなりませんでした。それでも多くの方の努力により無事終わることができました。

このコロナウイルス禍の中、ミニバスケットボールを愛する子どもたちのために、いろいろな面からご理解・ご協力をいただいたすべての皆様に心より感謝申し上げます。

この1年間は改めて、当たり前前に日常生活が送れることの有難さ、バスケットボールができることの有難さを考えさせられました。また私自身もチームのみんなにどのような言葉をかければよいのか、悩み続けた1年間でもありました。

そんな中、私も含め指導者・役員の気持ちはみな同じで、U12部会ホームページに3月10日付で載った『6年生と保護者の皆様へ』に集約されていると思います。よろしければ今一度お読みいただき、その気持ちを察していただければ幸いです。

さて今年度最後のコラムのテーマは、「負けることの大切さ」にしました。

いつものようにスポーツ新聞の記事から、「負けること」について書かれている部分を抜き出し、その大切さを伝えたいと思います。

と同時に、この1年間、思うようにバスケットボールができなかった選手の皆さんへ、「負けること」を「できない（できなかった）こと」に置き換えてのメッセージとします。

6年生の皆さん。

この1年間、確かにバスケットボールを十分に楽しむことはできませんでしたが、今回のいろいろな経験は、皆さんのこれからの長い人生で、必ず意味を持ってきます。

少ない練習時間とはいえ、皆さんは「やり切りました」。できることを「精一杯、頑張りました」。結果ではなく、この『努力』が価値あるものです。

そしてそんな姿を見て、お母さんやお父さん、チームのコーチを始め多くの方が、元気と勇気をもらいました。本当にありがとうございました。

また、励まし合い助け合いながら練習したり、苦しい個人練習を頑張ったりと、この困難な時期を共に過ごした多くの仲間ができました。この仲間は、一生の宝物です。

今から何年か後、「小学校6年生の時、ちょうどコロナウイルス禍で、まともに練習できなかったよね」「そうそう、試合なんて、数えるほどしかできなかったよね」「でもできることを、一生懸命頑張ったよね」と笑い話ができる仲間をこれからもずっとずっと大切にしてください。

<北京五輪の記事より>

「やりきりました」と言った羽生結弦の表情は、どこか晴れやかだった。フィギュアスケート男子シングル、3連覇は逃した。唯一追い求めた4回転半も成功には届かなかった。思い描いた通りにこそならなかったが、その表情は決して暗いだけではなかった。

五輪の神様に愛されてきた。14年ソチ大会はパトリック・チャン（カナダ）に競り勝ち、18年平昌大会はケガから奇跡の復活優勝を遂げた。実力はもちろんだが、少なからず「運」もあったはずだ。競技人生には苦悩もあっただろうが、成績だけをみれば、五輪で「持っている」選手だった。

しかし、今回は「運」がなかった。SPを普通に終えられれば、結果は違ったかも。4回転半にも成功して、3連覇していたかもしれない。ただいろいろなことを考えると「勝たなくてよかった」とも思える。

羽生と同じように体操個人総合で五輪3連覇を目指した内村航平は、引退会見で「金メダルよりもリオから東京を目指した4年間で宝物」と答えた。勝ち続けることができなくなって苦しんだことこそが、貴重な財産だというのだ。

日本選手最多8個の金メダルを持つ体操の加藤沢男さんは「一番は（個人総合3連覇を逃した）76年モントリオールの銀メダル」と話す。「負けて初めて、勝てるのは負ける選手がいるからと思えた。あの負けがなければ、嫌な男になっていたよ」と笑った。

4連覇に挑んで失敗したレスリング女子の吉田沙保里さんも同じことを言った。国民栄誉賞を受賞した後に挑んだ五輪。国民の期待に応えることはできなかったかもしれないが、今は「負けを知れてよかった」と話す。

我々には考えもつかないが、勝ち続けた先人たちが口にするのは「負けることの大切さ」だ。「その後の長い人生で、必ず意味を持ってくる」と。

今後どういう道に進むのかは分からないが、どの道でも「金メダルをとった五輪」と「思い通りにならなかった五輪」の経験はきっと生きる。

4回転半成功で3連覇は確かにすばらしい。限りなく大きな感動を我々に与えてくれたはずだ。ただ、最後まであきらめず、真摯（しんし）に4回転半に挑戦し続けた姿も、すばらしかった。成功することと同じくらい、いや、もしかしたらそれ以上に見ている者の心に残る。

さて来年度のスタートも、もう目の前です。

新年度、チームの役員になられた保護者の皆様、まだまだ先が見えない不安な中での活動となりますが、選手のために、1年間どうぞよろしくお願ひいたします。

また指導者、役員の皆様におかれましては、選手の健康を第一にコロナウイルス対策をしながら「できることをできる限り行う」というU12部会のスタンスで、バスケットボールを愛する子どもたちのために、今後ともよろしくお願ひいたします。

今のコロナウイルス禍が早く終息し、すべての子どもたちが安心してバスケットボールができる日が来ることを心より願っています。